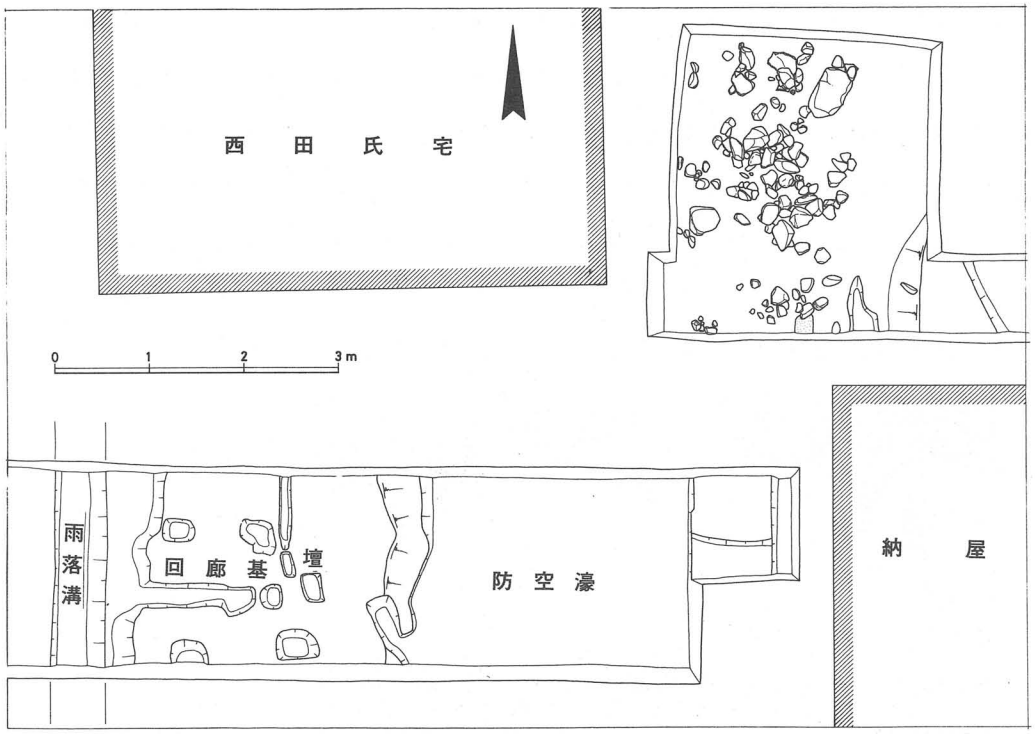
奥山久米寺跡の調査

昭和４７年９月 .昭和４８年１月

昭和 47 年度、 奥山久米寺旧境内で家屋改築にともない 2 件の発掘届が提出され、これについて発掘調査をおこなった。調査地は久米寺現本堂の北側で、旧金堂と講堂の間に位置する西田茂氏宅と、現塔跡の南に接する寺口正雄氏宅である。両者とも現家屋の敷地に改築するため、また諸般の事情から発掘地域は極く限られた範囲にとどまった。発掘面積は 77 m²である。

金堂北側地区（西田茂氏宅） 発掘地は久米寺現本堂北辺より北へ 5 m、本堂西辺より西に 14 m はなれた地点である。現在住居となつている主屋が改築されるが、調査は改築にともなう種々の制約から、主屋の南側および西南側の空地を主に、東西方向のトレンチを設定して発掘をおこなった。



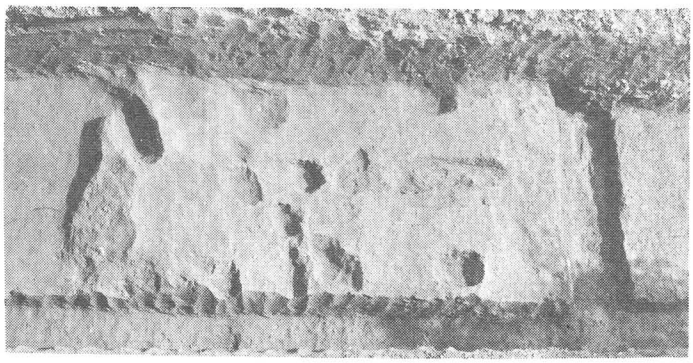
奥山久米跡遺構実測図

発掘の結果確認した遺構は、久米寺の中心伽藍をとりまく想定西面回廊基壇および西側の雨落溝（挿図）である。回廊基壇は、東半部が防空濠掘穿のため削り取られていたが、西半部は比較的遺存状態は良好であった。基壇は旧地形の上部を約１ｍほどの厚さで整地して平担面とし、その上面に赤褐色の砂質粘土を高く盛土し基壇とする。その西端に素掘りの雨落溝がある。基壇は現存部分で幅 3.4 ｍ、高さは最も良く残った部分で 25 ㎝である。西側雨落溝は幅55㎝深さは現存基壇上面から 43 ㎝、基壇外側の平担面から 22 ㎝の深さである。基壇上面は後世に掘られた小穴がいくつかあったが、基壇化粧を示す構造物は遺存していない。この雨落溝および基壇外側には多量の瓦類が堆積していた。

基壇東半部は、基壇が削除され顕著な遺構は発見できなかった。ただ、基壇西端より東へ約７ｍの地点で、凝灰岩、大型の礫などが散在しており、その上面に多量の瓦類が堆積していたのが注意される。おそらく、後世に、基壇の東端にあった諸施設を破壊し、一括投棄したものであろう。したがって、今回の調査では回廊基壇幅については、その数値を得るに至っていない。

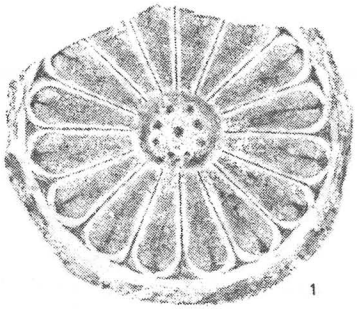
伽藍配置における回廊基壇の位置および実数値については、久米寺自体の伽藍中軸線が明らかでなく、適確に指適できない。かりに塔跡礎石群をほぼ伽藍中軸線に近いと想定した場合、今回の基壇西端からこの線まで約 32 ｍである。

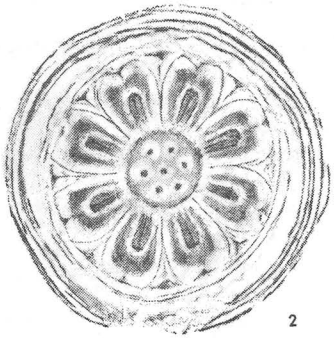
出土遺物は軒丸瓦六型式、軒平瓦二型式のほか、丸瓦・平瓦を多量に発見した。軒丸瓦は図示したもののほか、単弁八葉蓮華文やいわゆる大官大寺式の軒丸瓦がある。軒平瓦は、重弧文と大官大寺式のものがある。土器類は下層の整地土中から古墳時代に属する須恵器、土師器が若干出土した。



回廊基壇（下が北）

塔跡南側地区（寺口正雄氏宅）　発掘地は塔跡と塔跡の南約25mはなれて東西にとおる道路の間に位置する。家屋の改築にともなう発掘調査で、今回は塔跡の南縁に接する庭地を調査した。庭地と塔跡の間には約120cm程度の落差があり、一段塔跡地表面が高くなっている。さらに、塔跡上の露出した礎石群の柱座の上面は、地表より約50cm程高くなっている。したがって、礎石柱座面から発掘地の地表面まで約170cmの差となる。





奥山久米寺跡出土軒丸瓦（1/4）

発掘の結果、遺構は、久米寺関係の遺構は後世の土地造成のため削平され、わずか江戸時代末以降の建物の跡が発見されたにすぎない。建物は地表下1mの所で周囲に長径30cmほどの自然石の雨落葛石をめぐらしているようである。この内側で建物の側柱列の礎石抜取穴一個を検出した。礎石から雨落葛石まで約120cmを測る。この建物の東側から染付を主として陶器類、瓦類が出土した。

この建物の上方約40cmの所にも、江戸時代末から明治初年にかかる建物一棟の存在を認めた。

なお、本調査に関連して、塔跡の西側の畑地に、二本のトレンチを設定し、西回廊跡の検出を試みた。周辺は後世の削平が著しかったが、先の西田氏宅で検出した西面回廊の西側雨落溝の延長部分と考えられる痕跡が遺存していた。ほかに久米寺の関係遺構はなく、大半が古墳時代の小穴群であり、遺物としては土器類が主であった。

久米寺の旧境内は、現在大部分が民家となっている。寺域および各堂宇の学術調査も今日までおこなわれておらず、その実態は不明な点が多々である。今後あらゆる機会をとらえ、旧境内の調査が進められるべきで、今回の調査はその第一歩といえる。最近の周辺地域の開発に対しても、早急に寺跡全域の史跡指定とその保護が必要となってきている。